



日本俱楽部会報

令和2年11月 第26号

～講演委員会便り～

〔講演会内容は、オフレコであります。ご参考のため、講演委員の感想文の形でまとめたものです。〕
文責は講演委員会にあります。

令和2年7月21日（火）

講師 法政大学国際日本学研究所教授

王 敏 氏

演題 日中共有の「平和資源」—再認識と再開発—
—周恩来の遺産を中心に—

講師は、中国河北省出身。故周恩来首相の提唱した「日本語要員養成プロジェクト」に応じて大連外国语大学日本語学部、四川外国语学院大学院を卒業した後来日。学習院女子大学講師、東京成徳大学教授、政策研究大学院大学客員教授等を経て、平成15年に法政大学国際日本研究センター教授に就任、同時に、中国の複数の大学の客員教授、客員研究員を兼務。平成30年、（一社）日中平和発展推進協会会长に就任。



講師は、古代からの日中の文化交流、日中文化の共通性を踏まえた上で日中平和共存を提唱。特に、日中両国民の相互理解と交流関係の拡大の基本として、政治・軍事に振りまわされない深く安定した民間文化交流の重要性を提唱し自らも実践している。

今回は、周恩来の日本留学による日本の歴史・文化認識や日中国交回復における周恩来首相の対日外交姿勢を、改めて日中間の平和維持のためのモラルの共通遺産とすべきだとする立場での講演。

講師の当俱楽部における講演は今回が初めて。
講演の主なポイントは以下のとおり。

①周恩来は南開中学在学（1913～17年）中、下関条約調印の李鴻章の随員であった日本通の陶大均と出会い、陶の設立した「南開大学」の一期生として日本に留学。神田・神保町界隈に下宿し予

備校に通う傍ら、浅草を6回も訪れ、歌舞伎・映画見物等を含め広く日本の下町文化に触れる。

②1919年、京都・嵐山を2度訪問、水運・治水の豪商「角倉了以」の事蹟に出会い、日中とも「治水事業」が国民のために為すべき最大の事業であるとの感を抱く。すでに「角倉」は日本の「禹王（BC1900年頃・夏王朝の治水の王）」と呼ばれていたが、周恩来の故郷・紹興には巨大な「大禹陵」が存在していた（⇒「禹文化」の共有、先祖・死者祭祀文化の共有）。さらに、「大悲閣千光寺（黄檗宗）」を訪れ「仏教の共有」や「漢字文化の共有」（ちなみに、年号「平成」の出典は西安・陝西碑林博物館所蔵の「開成石經」<尚書第2巻>の「地平天成」←1992年10月、昭和天皇・皇后訪問）、「儒教文化の共有」（特に、陽明学、朱子学）や「節句の共有」（1919年の「清明節」は4月6日）にも触れている。

—1919年の2度に渡る「京都嵐山」訪問の感概を謳った漢詩「雨中嵐山」は、1978年8月、「日中平和友好条約協定」を記念して重厚な「雨中嵐山詩碑」として嵐山公園（渡月橋の麓近く）に設置されている（揮毫は、友人で親家の廖承志）。

③周恩来の遺族は、周がつねづね「私は日本で生活したことがあり、日本についての印象がとても深い。日本には非常に美しい文化がある」「日本人民は勤勉で勇敢で英知があると認識している」と言っており、1972年10月の日中国交回復の田中首相との会見では「私は長い民間交流のレールに乗って進んできたが、今日ようやくここにたどり着くことが出来た」と述べている。

～新型コロナウィルス感染対策（経過のご報告）～

7月以来、三密の防止等に最大の注意を払いながら、日本俱楽部の活動、イベントはほぼ平常通り運営しております。毎月の午餐会もソーシャルディスタンスを確保できるようにテーブルの配列に工夫をしながら実施しています。講演会も十分ディスタンスの取れる座席とする等工夫をしています。

ただ、感染の流行は下げ止まらず、再びの急増の恐れも懸念されるなど注意を要する状況であり、立食形式で行われます恒例の秋の会員親睦会は中止となりました。また、見学会につきましても年内は中止となりました。会員の皆様にはご理解をお願いし、このような状況のもと一層のご自愛のほどお願い申し上げます。